雜吟二十句

鹽野奇零

麥刈に急ぐ男や馬曳きて
此處彼處朝餉の煙や若葉越し
躾て顏洗ふ流しや杜若
更衣京へ行かんと思ひけり
水に浮く藻草の上や初ほたる
軒下に風呂を焚きけり麥の秋
駄菓子賣る店も留守なり田植時
田勞れの馬撫でゝ居る新樹かな
植へる田やよき日撰みて門田より
山越せば乳母の在所や鯉のぼり
古寺に木魚の音や蚊のうなり
まゝことの莚に並ぶ苺かな
風ほめて腰にさしたる扇かな
髮結ふて簞笥あけげり更衣
蕾して土をかへけり白牡丹
日の暮を牛の子遊ぶ夏野かな
夕暮や池の葦間に飛ぶほたる
菅笠の古びて見えぬ五月雨
涼しさや登りつめたる峠坂
盛狩親しき友と河一と重

捨子の歌

つゆたけ

めぐみの母に抱かれて、
あたりを暗き闇にして、
只我一人廣き野に、
草の褥の其の上に、
母の胎内出でしより、
かゝる憂目に遇ひにける、
鬼にも勝ると言ふべけれ、
さはさり乍ら恨みんや、
人より生れし我なれば、
折しもそよと吹く風に、
いともつめたく我顏に、
驚き大空見上くれば、
我を招くが如くなり、

ちゝのむ夢はさめ果てぬ、
母は何處へ行きにけん、
襤褸に身をば纏はれて、
未だ幾日ならずして、
我が親達の心こそ、
己が糊口もなしかぬる、
是非なき事とあきらめて、
葉末の露のちりかゝる、
笑を含める明星の、